広宣上人考（下）

――唐代詩僧伝――

平野顕照

紅楼院点綴

時の公卿権門に対し異常とまで思われる執心をあらわした広宣という一詩僧が、朝廷より詔許された都での主たる住居は、安国寺の紅楼院であった。この寺院はそのころ長安の左街に属する長楽坊の区域内にあった。ここをねじろにして禁中への出入が容易であったとみえる。「唐会要」巻四八、議釈教下をみると、

安国寺。長楽坊。景雲元年（七一〇）九月十一日。勅して龍潜の旧宅を捨し寺をつくらしめ、便ち本封の安国を以て名となす。

安国寺。長楽坊。景雲元年九月十一日。勅捨龍潜旧宅為寺。便以本封安国為名。

とある。すなわち睿宗（七一〇―七一二在位）が高宗の第八子、つまり中宗の実弟として、龍朔二年（六六二）に生誕してより所住していた故宅を寄捨して創建したのが安国寺である。しかも寺名は神龍元年（七〇五）一月丙午、中宗が即位するにおよんで、睿宗を安国相王と封号したのにちなんでいる、という。このことはすでに唐の段成式が「酉陽雑俎」続集巻五、寺塔記上で伝えている。「長楽坊の安国寺、紅楼は、睿宗の藩に在りし時の舞榭」がそれである。すなわち睿宗が親王であった頃の歌舞の舞台が紅楼院の前身である、という。まことに「紅楼」とは歌妓の哀愁を連想させる名称ではある。以上の記事はのち宋の敏求の「長安志」巻八、

宋の尤袤の「全唐詩話」巻四、宋の計有功の「唐詩紀事」巻五七、さらに清の徐松の「唐両京城坊攷」巻三などに援用され、伝承されている。近時に至って任二北が「敦煌曲初探」（中国戯曲理論叢書・上海文芸聯合出版社・一九五四年版）の後記と修辞との項目のなかで注意をはらって記述している。それは韓愈の「広宣上人頻りに過らる」（一八〇八五）詩をおさめる「五百家註韓昌黎集」にみえる注記を沿襲したものである。

かく由緒ある安国寺はまた「宋高僧伝」をひもとくと、多くの高僧が所隷しかつ歴代の天子の行幸が頻繁であったあとを随所にみいだす。わが国の慈覚大師円仁もかつてこの寺に足をふみ入れていること、「入唐求法巡礼行記」巻三の記事から窺われる。さらに柳公権（七七八―八六五）が六十四歳の時に書丹した唐楷の名品となっている「玄秘塔碑」は、碑文を裴休が撰している（全唐文巻七四三）が、この骨塔中の主人たる大達法師端甫（宋高僧伝巻六有伝）も安国寺に止住して、内供奉をつとめている。そして徳宗、順宗、憲宗らの知遇をえて、たびたびの行幸を蒙っている。とりわけ憲宗は元和十四年（八一九）に、仏骨を鳳翔府の法門寺から安国寺に迎置し、国をあげて供養をつくしたゆかりをもつ。この行事に意見を具申して、都おちせねばならなくなった韓愈の事件はあまりにも有名である。憲宗はまた李絳の上奏を嘉納して、安国寺に聖政碑を建てたこと、「旧唐書」巻一六四に伝えている。かように安国寺に対する帝室の信崇の篤さをよくものがたっている。大達法師の仏教業績といい、憲宗の安国寺にまつわる諸行為といい、広宣は事実を熟知し見聞していたであろうと想像する。

さらに中唐頃の長安諸寺のようすをうつしたものと推定されるが、時日をさだかにできない記載に、

長安の戯場、多く慈恩に集り、小さきものは青龍に在り。その次は薦福・永寿。尼講は保唐に盛んにして、名徳は安国に聚まる。士大夫の家の入道は、尽く咸宜に在り。

長安戯場多集于慈恩。小者在青龍。其次薦福永寿。尼講盛于保唐。名徳聚之安国。士大夫之家入道。尽在咸宜。

という一文があり、宋の銭易の「南部新書」戊におさめてある。まことに安国寺は禁城内における高名な緇徒の集合場所にちがいなく、いわば緇徒の間で栄達を期待させるステップ的名刹であったと思われる。もって広宣が安国寺に所住させられた意義がよくわかるのである。

かくて安国寺紅楼院におちついた広宣は、機会あるごと

に詩作をかさねていった。よってかれの詩集が「紅楼集」と名づけられた、という。しかしその実体は杳としてわからない。

このほか紅楼院の片影を詩篇より窺うとしよう。李益が「紅楼院に詣り、広宣を尋ねて遇わず、題を留む」詩（一五一〇八）で、

柿葉翻紅霜景秋　柿葉紅に翻る　霜景の秋
碧天如水倚紅楼　碧天水の如く　紅楼に倚る
隔窓愛竹無人問　窓を隔てたる愛竹　人の問うなく
遣向隣房覔戸鉤　隣の房に戸鉤を覔め遣む

と、秋色漂よう晴れわたった日の紅楼院には、柿と竹との二物が風情をよくきわだたせていた印象として点詠されている。この柿樹については広宣も、「寺中の柿樹、一蔕四顆の詠　応制」詩に、

珍木生奇畝　珍木　奇畝に生じ
低枝払梵宮　低枝　梵宮を払う
因開四界分　因は開く四界の分
本自百花中　本は自から百花の中
当夏陰涵緑　夏に当りて陰は緑を涵し
臨秋色変紅　秋に臨みて色は紅に変う
君看薬草喩　君看よ　「薬草の喩」
何減太陽功　何ぞ太陽の功を減ぜんや

と詠じている。「文苑英華」巻一七八では、末句を「何試太陽宮」と作っているが、措字的に好ましく思えないのでとらない。紅楼院をおおうがように生きている柿樹は、仏理の「四大」の説を象徴してか一蔕四顆の結実をみせ、夏には太陽の直射を避けるのによく、秋には緑葉を紅色に変える珍木である、という。法雨の注ぐこの霊域にふさわしい生えぬきの珍樹で、天子自から応制詩を求められるほど紅楼院を象徴する有名な大木であったようである。これがむしろ楼名の発端になっているのかもしれない。「寺中に花を賞ず　応制」（文苑英華巻一七八）詩が広宣に要請されるように多くの花樹で紅楼院はとりまかれ、遊賞を満喫できるたたずまいをそなえていたとみえる。

なおまた段成式と張希復との聯句作品に「長安諸寺に遊ぶ聯句、長楽坊安国寺、紅楼聯句」（唐詩紀事巻五七）と題せられるものがある。かように安国寺は段成式の詩作に取りあげられる注意をひいた梵宮で、その著名さを誇っていた異色的存在であったのであろう。

広宣の文学

唱和詩

「唐詩紀事」巻七二、僧広宣の条によると、

宣は会昌の間に詩名あり。劉夢得と最も善し。「宣の蜀に居し、韋令公との唱和詩を寄せらる」に、劉は答えて云う。「碧雲の佳句、久しく芳を伝え、曽て都城に向て、草堂に住す。錫を振えば常に長者の宅に過り、文を披けば猶お令公の香を帯ぶ。一時の風景は詩思に添い、八部の人天は道場に入る。若し相い期して同に舎を結ぶを許さば、吾が家もとより柴桑に近し。」宣。会昌間有詩名。与劉夢得最善。宣寄居在蜀。与韋令公唱和詩。劉答云。碧雲佳句久伝芳。曽向都城住草堂。振錫常過長者宅。披文猶帯令公香。一時風景添詩思。八部人天入道場。若許相期同結舎。吾家本自近柴桑。

と記録する。右の原文に附した圏点の文字のうち、「文苑英華」巻二二一と「劉夢得文集」巻七とが、「都城」を「成都」に、「舎」を「社」に、「近」を「有」にそれぞれ作り、「文苑英華」のみ「人天」を「天人」に作っている。すべて「唐詩紀事」よりすぐれる。

ともかく広宣は会昌年間（八四一―八四六）において、劉禹錫とのよしみがめだち、さらに詩名も高かったことを記している。しかしすでに上篇でふれたように、劉禹錫は会昌二年（八四二）に没しているので、右の記事にいう会昌間とは、事実上二年間をのみ意味し、劉禹錫の最晩年ということになる。すなわち劉禹錫が検校礼部尚書兼太子賓客分司の職事にあった頃となる。しかもそれ以前でも活躍していた広宣の詩名は、この期に至るまでさほど称揚されてないで、劉禹錫とのよしみをもつことによって有名になったかのように読める。広宣の文学活動をかように僅か二年間に集約して、なぜ「唐詩紀事」にとりあげねばならなかったのか、計有功の本意がいま一つよくわからない。

また広宣が蜀にいた頃、韋令公との唱和詩をとりかわしていたとも記している。およそ唱和詩の多作は中唐頃からめだった文学行為として有名である。「滄浪詩話」を撰した宋の厳羽は、詩評の条で、唱和詩を一つの文学様式と認め、白居易と元稹との唱和詩をもってあたかも最初のようにまで言及している。「和韻は最も人の詩に害あり。古人は酬唱するに次韻せず。此の風は始めて元・白・皮・陸に盛んなり」というのがそれである。しかし唱和を通じて相互の意志疎通を深め、情操をゆたかにし、はては文学的感

覚と技倆とを助長し、個性的詩作の充実をもたらせたことは否めない。かくて唱和詩が白居易の文学研究に欠かせない意義を有していることに注意を払って、花房英樹氏は「白居易研究」にまとめすでに言及しておられる。かかる文学風潮を背景にして行われたのが、広宣と韋令公との唱和詩であったと同時に、広宣はまた令狐楚（七六五―八三七）とも詩の唱和をしていたことを記録にとどめている。すなわち「新唐書」芸文志、総集類に収載する「僧広宣与令狐楚倡和一巻」という記事によってわかる。例えば釈霊徹の「酬唱集」は十巻もあった、というから、詩文学にたんのうな緇徒は唱和形式の文学にも手をそめ、一つの詩巻にまとめていたのである。

令狐楚といえば穆宗朝の重臣で、かれの晩年に李商隠（八一二―八五八）の文学的才能を認めて庇護を加え、それまで共感していた古文運動への李商隠の傾倒を、令狐楚が得意とする駢儷文へ方向転換をさせた文学上のゆかりをもっている。令狐楚は王涯、張仲素らとともに「三舎人集」を編集している、文学的力量をそなえたよき理解者でもあった。しかも令狐楚は「節度宣武酬楽天夢得」（唐詩紀事巻四二）、「春思寄夢得楽天」（万首唐人絶句巻一八）などの詩作品があり、劉禹錫、白居易、広宣、令狐楚らの間に、詩的連帯が生じていたことが十分想定される。もっとも劉禹錫、白居易らにも令狐楚への贈答詩が事実存在していたこというまでもない。それらはおよそ令狐楚の晩年にあたる穆宗朝に集中している。

それでは広宣が唱和した韋令公とは一体誰であるのか。平岡武夫氏編の「唐代の詩篇」には韋皐（七四六―八〇六）にあてている。するとかれの死後、白居易は「武相公が韋令公の旧池の孔雀に感ずに和す」詩を元和十年（八一五）に作っているが、この韋令公のこととなる。また女流詩人の薛濤が「罰せられて辺に赴き懐あり。韋令公に上る（たてまつる）」二首（翠琅玕館叢書本）を贈呈した相手の人物である。そこで「旧唐書」巻一四七、「新唐書」巻一五八の韋皐列伝をひもとくと、徳宗の貞元の初（七八五）に、剣南西川節度使を奉じてよりのち二十一年間、死没の前年に至る頃まで、かれは自己の生涯の約三分の一を蜀の地で過している。そして唐帝国の為に数回出兵して、任地において吐蕃の侵寇を完全に阻止する武勲をたてている。かく蜀地の安寧に尽力したが為、当時に陸暢が「蜀道易」詩を作って称讃した、という。したがって韋皐と広宣との蜀地における唱和は条件的に可能である。おそらく韋皐の死後に及んで、かれとの唱和詩巻を広宣は劉禹錫に送り届けてきたのであろう。

劉禹錫の酬答詩は晋の僧慧遠たちが結んだ「白蓮社」を発想の底辺にすえ、詩的交誼を求めて歌詠している。まさに広宣と劉禹錫との友好のあつさを窺わせるのである。それにしても広宣にむけて贈答した作品が、劉禹錫にわずか三首しか現存しないのは、「唐詩紀事」に「最も善し」と記述することからすればいささかものたりない感がする。しかし別の作品である「慧則法師の都に上るを送り、因りて広宣上人に呈す」詩序とともに、劉禹錫が当時の仏教結社の一員たる自覚をいだいていた、心理的傾斜を窺うにたる好箇の詩篇ではある。しかし広宣は劉禹錫との文学的交流のみにとどまっていなかった。広宣は「皇太子頻りに存問を賜い、並びに唱和の新詩を索めたもう。因りて陳謝するあり」詩（文苑英華巻一七九）や、薛濤の詩題にみえる「宣上人、諸公との唱和を示さる」という、諸公との唱和詩および皇太子との唱和詩なども広く作製していたのである。

贈答詩

広宣が詩の贈答をはたらきかけた相手は、必ずしも劉禹錫にかぎられたことでなく、かなり広汎な詩人の間におよんでいる。それは次の作者と作品表をみて認められるであろう。

李益（七四八―八二七）
喜入蘭陵望紫閣峯呈宣上人（一五〇三七）
答広宣供奉問蘭陵居（一五〇六九）
乞寛禅師瓔山疊呈宣供奉（一五〇七〇）
詣紅楼院尋広宣不遇留題（一五一〇八）
贈宣大師（一五一三一）

朱湾（？―？）
過宣上人湖上蘭若（一六四七〇）

鄭絪（七五二―八二九）
奉酬宣上人九月十五日東亭望月見贈因懐紫閣旧遊（九一六五五）

段文昌（七七三―八三五）
還別業尋竜華山寺広宣上人（一七四三〇）

楊巨源（？―？）
春雪題興善寺広宣上人竹院（一七五七二）
和権相公南園閑渉寄広宣上人（一七五八〇）
送定法師帰蜀法師即紅楼院供奉広宣上人兄弟（一七五八四）
和鄭相公尋宣上人不遇（一七六五二）

韓愈（七六八―八二四）
広宣上人頻見過（一八〇八五）

王起（七六〇―八四七）
広宣上人以詩賀放榜和謝（一八一八三）

劉禹錫（七七二―八四二）
送慧則法師帰上都因呈広宣上人（一八九三一）
宣上人遠寄和礼部王侍郎放榜後詩因而継和（一八九四七）
広宣上人寄在蜀与韋令公唱和詩巻因以令公手札答詩示之（一八九七八）

張籍（七六八？―八三〇？）
贈広宣師（二〇三四〇）

元稹（七七九―八三一）
和王侍郎酬広宣上人観放牓後相賀（二一五四七）

白居易（七七二―八四六）
贈別宣上人（二二四九三）
広宣上人以応制詩見示因以贈之詔許上人居安国寺紅楼院以詩供奉（二二五五二）

雍陶（八〇五―？）
安国寺贈広宣上人（二七九九三）

賈松（八四八―九〇一）
贈広宣大師（四〇一四九）

薛濤（七六七―八三一？）
宣上人見示与諸公唱和（四三六五六）

（注）各作品の下の番号は、「唐代の詩篇」にもとづいて付したのである。これによって、その作品がどのようなテキストに収載されているかを見出し、相互の照合によって詩を正しく理解できる便利がある。本論はすべてこれを応用している。

このほか李益と広宣、あるいは李益、広宣、杜羔の三者の間で作られた聯句詩六首があげられる。それはのちに改めてのべるとしよう。

この表をみてみると、広宣は憲宗、穆宗朝をピークにして、かなり長期にわたって詩作活動を続け、当時の詩人たちと幅広い交際をしていたことが認められる。しかも広宣が詩の贈答をかわした詩人たちは、それぞれ個性にみちた作風をもって詩名をあげているが、「唐代の詩篇」をみてもわかるように、互いに詩を通じて何らかの連関のあとをとどめている。例えば鄭絪は憲宗朝に宰相をつとめた重臣で、政界にあってはつねに中庸公正をもった政治姿勢を貫いた、といわれている。かれに対して広宣は「九月十五日夜、鄭尚書絪の東亭に宿りて月を望み、杜給事に寄す」詩（唐詩紀事巻七二）を作り、鄭絪は「宣上人が九月十五日、東亭にて月を望みて贈らるに奉酬し、因りて紫閣の旧遊を懐う」応酬の詩を作っている。この鄭絪は「道宗上人に題す十韻并びに序」という白居易の作品にあらわれている。その序文には「善済寺の律大徳の宗上人の法堂中に、故の相国の鄭、司徒の帰、尚書の陸刑部、元少尹より、今の吏

部の鄭相、中書の韋相、銭左丞に及べる詩あり。其の題を覧るに、皆上人と唱酬す云云」（白氏文集巻五一）と記され、白居易との面識はもとより、仏教への関心と緇徒とのまじわりのあとをみせる。なお「宋高僧伝」巻五、澄観伝をみると、鄭絪の仏教的連関の一端がよく窺える。この鄭絪に楊巨源は「鄭相公が宣上人を尋ねて遇わざるに和す」という作品をのこしている。楊巨源はまた白居易の詩友でもあること、楊巨源にあてた白居易の詩が五首存するのによって肯ける。このほか韓愈、張籍、白居易らの関係、白居易と元稹、白居易と劉禹錫、章孝標と雍陶などの関係は周知のところである。

かようにみてくると、広宣は詩中心の文学を通じて交際の範囲を拡大していった社交家であるとの印象をいだく。なにも公卿権門の間にのみ極度の関心があったのでないことよくわかる。うらをかえせば、広宣が禁中において内供奉の地位にあったことが、幅広く詩の贈酬を可能ならしめる当時の詩人たちの許容的対応をもたらしたものと思う。しかしすでにみたように広宣の詩名は朝廷にまで聞えたことであるから、当時の詩人たちに堂々と伍して文学活動を行った詩僧である、と考えておいたほうがよかろう。いずれにしても広宣の社交ぶりを窺うと、中唐期における詩作の存在が、社会上どれほど重要な役目を果していたか、その真相をよくあらわしている。まこと社交の中心は詩が第一等であった、との感が深い。

聯句詩

広宣は贈答、唱和の方面に詩作の意欲を集中せずして、聯句にもその力量を発揮している。聯句は唐中期になって、従前にもまして多作されるようになったところの重要な文学様式である。いま広宣が関与する聯句作品をあげると、次の通りである。

宣上人病中相尋聯句　李益・広宣
八月十五夜宣上人独遊安国寺山庭院歩人遅明将至因話昨宵乗興聯句　李益・広宣
重陽夜集蘭陵居与宣上人聯句　李益・広宣
与宣供奉携瓢樽帰杏溪園聯句　李益・広宣・杜羔
蘭陵僻居聯句　李益・広宣・杜羔
紅楼下聯句　李益・広宣・杜羔

これら聯句は広宣が内供奉をつとめていた頃の作であり、李益や杜羔との間でとりかわされているが、李益が主宰しているようである。

大暦の十才子に屈指される李益は「旧唐書」巻一三七に

よると、憲宗に文章の名声をもって都へ迎えられ、秘書監、集賢殿学士など文事に従事している。しかもかれの詩が一篇できるたびに、宮中の楽人どもは賄賂を用いてまでも作品を求め、宮廷楽曲にくみ入れた、といわれるほど卓絶した詩才をそなえていた。いっぽうでは蔣防によって「霍小玉伝」という唐代小説作品のヒーローに潤色されていて名が高い。杜羔は「新唐書」巻一七二に、憲宗朝に歴任した官衙を録し、いずれも中央政界での参与をとどめ、都における生活を過していること明らかである。またかれは努力して詩才を高めた、という。したがって広宣とかれらとの聯句作製は可能な事情にあった。

かれらの聯句は五言四句を主体にして行われている。いま「蘭陵の僻居　聯句」を例にすると、

潘岳閑居賦　潘岳　閑居の賦
陶潜独酌謡　陶潜　独酌の謡
二賢成往事　二賢は往事に成りしに
三径是今朝　三径は是れ今朝

広宣

生幸逢唐運　生れて幸いに唐運に逢い
昌時奉帝堯　昌時　帝堯に奉ず
進思諧啓沃　進みては啓沃に諧うを思い
退即混漁樵　退いては即ち漁樵に混わる

李益

蠹簡封延閣　蠹簡を延閣に封じ
彫欄閟上霄　彫欄を上霄に閟す
相従清曠地　相い従う　清曠る地に
秋露挹蘭苕　秋露　蘭苕に挹ぐ

杜羔

と「唐詩紀事」巻三〇にみえる。この聯句の形体は、青木正児氏の「聯句浅説」（青木正児全集第七巻所収）に照合すれば、六朝風の体にそった一般的作りぶりである。蘭陵は紫閣峯を望見できる都城内の一坊をいうのであろう。ここに李益が僻居生活を過すようになった頃の作品で、おそらく元和末年前後の作であろうと推定される。李益の「蘭陵に入りて紫閣峯を望むを喜び、宣上人に呈す」五律詩がそれをものがたる。その首聯に「草を薙りて三径を開き、林に巣くうて一枝を喜ぶ」とあり、第七句に「今より僻陋に安んじ」とみえるように、ある職事から退いたのである。僻居の理由は「旧唐書」李益列伝に、「才地を自負して、凌忽る所多く、衆に容れられず。諫官は其の幽州詩句を挙ぐ。居を降されて散秩す」と記録してあるのによる、と考えられる。蘭陵へ広宣も足をふみ入れたことは、李益の

「広宣供奉の蘭陵の居を問ねしに答う」詩の題名がかたる。したがって「蘭陵の僻居　聯句」において、広宣が李益の僻居を、潘岳、陶淵明に擬して称揚歌詠したのに対し、李益は世情安定のもと、進退の道理を誤たずに堂々と履行できた心情を歌う。杜羔も憲宗に免官されたことにより、李益の退居に従い、それを自然も共感しているかのように詠歌し、三者ともに共通して、このたびの李益の退居をむしろあっぱれな行為のように平然とうけとめて歌っている。

かように広宣と詩文学の交際をのこしている李益は、「宣上人の病中相い尋ぬ　聯句」において、

草木分千品　草木　千品を分ち
方書問六陳　方書　六陳を問う
還知一室内　還ち知る　一室の内
我爾即天親　我と爾と即ち天親なるを

と詠じ、広宣と天上の親しさに比肩できる仏教の境涯における親友である、という。いわゆる両者の深い親密さをよく表明している。李益と広宣とはかような関係にあった。かれはまた「賈弇秘校の東に帰るを送り、振上人に寄す」詩を作り、さらに「応門緑苔を賦す」のもとに僧法振と聯句している。なお宋の周弼の「三体詩」には僧法振の詩を一首収めている。かように李益は僧法振との親交をももっていた。「振上人に寄す」詩は「文苑英華」巻二二〇に収載され、「唐詩紀事」巻七三所載のものと詩句にかなり相異があるのを附言しておく。李益と広宣との親密さは理解されるが、どちらがどちらに働きかけたのか、その先鞭の如何についてはさだかでない。ただ詩が大きな媒介になっていることだけはたしかである。かく聯句形式の文学を通じても、広宣は非凡の詩能力をもって、詩作活動を怠らなかったことをよく記録がものがたっている。

応　制　詩

つぎに広宣の文学活動で注目されるのは「応制詩」の作製である。すでに上篇において指摘した「再び道場に入りて事を紀す　応制」詩は、「紅楼院　応制」と共に「唐詩選」巻五に収編され、詩意もよく知られている。そのさい両詩ともに従来から沈佺期の作品として伝聞されてきているにつき、広宣の作品となすべき考証をいささか試みた。しかるにこのことは明の胡震亨によって言及されているのをみいだした。それをここに紹介し明確にしておこう。すなわち「唐音癸籤」巻三二に、

唐人の詩は既に多く後人の補輯に出で、故の篇什の淆錯するを以て、一詩より三四に至るまで他の集中に見

え、是正すること難しとなす。其の顕かにして見易きも、誤を習いて察せざる者は、釈広宣の「紅楼」、「道場」二律の沈佺期が詩となし、銭珝の「江行絶句百首」の其の祖の起の集中に混入するに如くはなし。広宣の誤は、高氏の「品彙」に始まり、自後の選を歴る者これに因る。

唐人詩既多出後人補輯。以故篇什淆錯。一詩至三四見他集中。是正為難。其顕而易見。習誤不察者。無如釈広宣紅楼道場二律之作沈佺期詩。銭珝江行絶句百首之混入其祖起集中。広宣之誤。始高氏品彙。自後歴選者因之。

広宣は元和・長慶の両朝に並な詩を以て内供奉となり、安国寺の紅楼に詔居され、詩名は「紅楼集」にあり。白楽天諸家の詩題を見て考う可し。故に「紅楼　応制」の詩は、支遁・曇摩を以て比と為し、「自から憐れむ深院翺翔を得るを」という。其の「再び道場に入りて事を紀す」は、則ち憲宗の晏駕、穆宗の御極に在りて、内殿にて功徳を作すの時なり。故に「南方より帰去し再び天に生ず」および「見に乾坤を闢いて新に位を定め」等の句あり。而して「両朝長えに聖人の前に在り」を以てこれを結ぶ。其の詩は「文苑英華」に載せて、甚だ明らかなり。何に縁りて近代の諸刻は尽く沈詹事となし、李于鱗もまた然りとするやを知らず。且つ紅楼はもと睿宗の藩に在りし舞榭にして、玄宗の開元八年に捨して安国寺を建て院を立つること、段成式の「長安諸寺を遊きし記」および程大昌の「雍録」に詳し。これを計れば時に詹事は以前に卒す。安んぞ紅楼の題詩あるを得んや。

広宣。元和長慶両朝並以詩内供奉。詔居安国寺紅楼。有詩名紅楼集。見白楽天諸家詩題可考。故紅楼応制之時。以支遁曇摩為比。云自憐深院得翺翔。其再入道場紀事。則在憲宗晏駕穆宗御極。内殿作功徳之時。故有南方帰去再生天及見闢乾坤新定位等句。而以両朝長在聖人前結之。其詩載文苑英華。甚明。不知何縁近代諸刻尽作沈詹事。李于鱗選亦然。且紅楼本睿宗在藩舞榭。玄宗開元八年捨建安国寺立院。詳段成式遊長安諸寺記。及程大昌雍録。計此時詹事已前卒矣。安得有紅楼題詩乎。

この見解には一二の点で事実にそぐわないところがあるが、大綱において妥当であると思う。かような問題を孕む「唐詩選」選収の作品をはじめ、広宣は約十二首の応制詩を今に伝えている。

いま「駕　天長寺に幸す　応制」（文苑英華巻一七八）を例にあげると、

天界宜春賞　天界　春賞に宜しく
禅門不掩関　禅門　関を掩さず
宸遊雙闕外　宸は遊く　雙闕の外
僧隠百花間　僧は隠る　百花の間
車馬喧長路　車馬　長路に喧しく
煙雲浄遶山　煙雲　遶れる山に浄し
観空復観俗　空を観じ復た俗を観ず
皇鑒此中閑　皇鑒この中に閑かなり

と詠じ、春賞を満喫するため天長寺へ行幸されるありさまと、その寺域で窺われた天子の仏教的心境を讃えた詩意を含ませている。かように広宣は緇徒らしく仏教的配慮を詩作に巧みに布置しつつ、天子称揚の応制詩を構成している。広宣の他の応制詩もすべてこうした傾向にある。かくて広宣の応制詩は天子の崇仏心を機会あるごとに篤くさせ、護法心を高揚せしめたことであろうし、内供奉の詩僧たる面目を十分に達成しえたこと疑うべくもない。

いま一つ、「安国寺より駕の興唐観に幸すに随う　応制」は、

東林何殿是西隣　東林何の殿か是れ西隣し
禅客垣牆接羽人　禅客の垣牆　羽人に接す
万乗遊仙宗有道　万乗遊仙し宗に道あり
三車引路本無塵　三車路に引きもともと塵なし
初伝宝訣長生術　初め伝う　宝訣長生の術
已証金剛不壊身　已に証す　金剛不壊の身
両地尽修天上事　両地尽く天上の事を修め
共瞻鑾駕重来巡　共に鑾駕重ねて来巡するを瞻る

と、天子が道観へ行幸されるさまを詠じたものである。とくに後半二聯において仏・道二教に敬虔な対応をあらわす天子を、完全な宗教的人格者として絶讃している。詩作技術の美麗的配慮をめぐらして構成されていることは、応制詩という体裁上十分認めるが、「已に証す　金剛不壊の身」と表現した構想の根底で、道教への傾倒に先行して仏教体悟の状態にあった天子、とみてとった広宣の心理的作用が働いていたものと思う。かように天子の道・仏二教への対応もさることながら、広宣にも道観への出入を含む、広い意味での宗教思想が許容されていたことがわかる。

「応制の詩には、一般的にあまりよい作品がない。もともと感興があって作るのではない以上に、形式にも内容にもきびしい制約があって、千篇一律になってしまう。この体が天宝をもって事実上亡んでしまうのは、そのためであ

る。」と入谷仙介氏は「王維」（中国詩文選一三）の応制詩作品の解説でのべている。「文苑英華」所収の応制詩をみても、この見解はたしかに否定できない。しかし天宝以後に迎える中唐期においても、禁中では広宣に象徴されるような詩才ある僧を供奉させ、依然として応制詩をもとめていたこと、すでに上篇で「唐語林」を引用してふれた。ただ応制詩に抒情性を見出さないのはごくあたりまえであるのに、広宣の「聖恩、月磴閣に独り遊ぶに顧問あり、其の事を直書す　応制」では題名からはやくも窺われるように、広宣自身の心情を詠じて珍らしい。その詩は、

禅居河畔無多地　禅居の河畔　無多き地
来往尋春物正華　来往に春を尋ぬるに物正に華つく
磴道上盤千畝竹　磴道は上り盤る千畝の竹
欄干低圧万人家　欄干は低く圧る万人の家
簷前施飯来飛鳥　簷前の施飯　飛鳥来り
林下行香踏落花　林下の行香　落花を踏む
自解刹那知仏性　自から刹那を解し仏性を知る
不労更喩幾塵沙　更に幾ばくの塵沙に喩を労わさじ

と歌われている。この詩は建前上、天子の命を受けて作られてはいるが、内実的には応制詩に托して広宣の体得せし仏心を赤裸々に表明したものと読む。月磴閣へ単身遊賞し、そこで刻々に変遷する自然のあるがままの実体にふれ、そのものから仏性を知覚し、これ以上のよき譬喩的教示はない、と仏教心理の精華を提言する。この詩によって天子もなにがしかの感銘をおそらくうけとめたであろうと思う。かような情操を孕んだ作品を、広宣は応制詩の中にとどめていることに注意してよいであろう。なおこの詩はまた「文苑英華」巻一七五に収められ、第三句を「欄干低数万人家」、第五句を「簷前施飯来飛鳥」にそれぞれ作っている。

すでにふれた入谷氏の見解をはじめ、宋の葛立方の、「韻語陽秋」巻二における、

応制詩は他の詩の比に非ず。自から是れ一家の句法にして、大抵、典実富豔より出でざるのみ。

応制詩非他詩比。自是一家句法。大抵不出於典実富豔爾。

という故事や語詞の美しさのみとりえとするみかた、さらには明の胡応麟の、「詩藪」内篇巻五でのべる、

唐の応制諸首の抜れたる詩は、宋之問の三作の外、余は皆な未だ人の意を愜ましめず。

唐応制諸首抜詩。宋之問三作外。余皆未愜人意。

という発言に、共通して認められる応制詩という文学様式に対する低い価値批判の中にあって、広宣の広制詩につい

て、胡震亨ははじめて次のような評価を「唐音癸籤」巻八で与えている。

広宣の応制諸篇は、気色高華、まことに紫衣の名衲なり。

広宣応制諸篇。気色高華。哉允紫衣名衲。

内殿に供奉し、天子の指名によって、天子の起居ないしは寿辰などにつき、一篇の詩を奉呈するにふさわしい、上品さにすぐれた気味をそなえている、という。元和、長慶を含む中唐文学界で、広宣の応制詩のみは一つの異った味わいをもっていた、と認めてよかろう。かくて広宣が詩作をもって禁中に供奉したことは、朝廷および貴顕の間に仏教振興の点で相応の効果をあげたことであろう。やはり広宣は一般の当時の詩僧たちに比較して、おもな文学活動の場が同列でない異彩を放った存在であったとみえる。

詩僧広宣の面目

かように広宣は中唐文学界において、盛んに行われた諸種の文学様式をわりあい器用にこなして活用した詩僧である。この活動に対して広宣と詩的交際をもった人々はまた何らかの評価をもっていた。章孝標は「蜀中にて広上人に贈る」詩に、

曾持麈尾引金根　曾て麈尾を持ち金根を引き
万乗前頭草五言　万乗の前頭に五言を草す
疏講青龍帰禁苑　青龍に疏講し禁苑に帰り
歌抄白雪乞梨園　白雪を歌抄し梨園に乞わる
朝驚雲気遮天閣　朝に雲気に驚きて天閣を遮し
暮踏猿声入剣門　暮に猿声を踏んで剣門に入る
今日西川無子美　今日　西川に子美なきに
詩風又起浣花村　詩風　また起る浣花村

と詠じている。五言を主とする詩の才器を嘉納せられて禁中に入り、仏教の講説はおろかすばらしい詩は宮廷音楽にくみ入れられる力量の羽振りよさ、いまこの詩のほまれ高い緇徒が蜀に住まうようになり、なき杜甫に匹敵する詩風がまた興起することになった、という。張籍が作る「道士の宣師に贈る一作贈僧道」詩中の「五字の声名遠処に伝う」という、五言詩を得意とみる称揚や、劉禹錫の「宣上人が遠かに礼部王侍郎の放榜の後に和するの詩を寄す。因りて継和す」詩の一句で、「自から白雪を吟じ詞賦を詮び」の詩作ぶりなどと照合して、章孝標の作品は広宣に寄贈したものにちがいない。まさに杜甫的色彩をもちあわせた五言形式主体の作風に秀でた広宣であったことが想定できる。

鄭絪にも「一たび綵牋に佳句の満つるを覧れば、何人か

更に恵休の文を詠わん」と、「宣上人が九月十五日、東亭にて月を望みて贈らるに奉酬し、因りて紫閣の旧遊を懐う」に表現し、広宣の詩のすばらしさを絶讃している。李益に至っては、「一国の沙弥独り詩を解し、人々は道う恵休師に勝れりと」うたって、「宣大師に贈る」詩中において卓絶せる詩僧の評判あり、という。まさに白居易が「広宣上人、応制詩を以て示さる。因りて以てこれを贈る」詩で、「道林の談論、恵休の詩、一たび人天に到りて便ち師となる」と表現したのは、単なる外交辞令的賞美でなくして、心底それ相応の傑出せる詩僧と認めての措字であった、とうけとめたい。

いっぽう緇徒としての広宣のありようについても白居易はまた、

上人処世界　上人　世界に処し
清浄何所似　清浄なるは何の似たる所ぞ
似彼白蓮花　彼の白蓮花の
在水不着水　水に在りて水に着せざるに似
真空悟幻泡　真空にして幻泡を悟り
行潔離塵滓　行は潔くして塵滓を離る
修道来幾時　道を修めて幾時を来て
身心俱到此　身心ともにここに到るや

と「宣上人に贈別す」詩（白氏文集巻一四）に表現している。すなわち完成せる仏者の面目を具備し、真空清浄の境地はもとより、清潔な修行に終始している広宣をうつしだしている。これはまた白居易自身の仏教修得が未成熟であることへの厳しい反省でもある。この詩とても詩の技巧的調和をはかって、表面上かく詠歌したものとかたづけてしまうわけにはいくまいと思う。広宣と故郷を同じくする雍陶もまた、安国寺を訪れ、

馬急人忙塵路喧　馬急ぎ人忙しく塵路喧し
幾従朝出到黄昏　幾んど朝に出でてより黄昏に到る
今来合掌聴師語　今来し合掌し師の語を聴くに
一似敲冰清耳根　一えに敲冰に似て耳根に清めり

と広宣の感銘深い教化ぶりを、「安国寺にて広宣上人に贈る」詩で表現している。まこと清浄溢るる説法を拝聴した印象を受けとめたのであろう。

かような知己の評価に対し、広宣は正面きって李益との聯句の中で、

追歓君適性　歓を追うは　君　性に適い
独飲我空口　独り飲むこと　我　口に空し
儒釈事雖殊　儒・釈　事は殊にすと雖ども
文章意多偶　文章　意は偶うこと多し

の一首（唐詩紀事巻七二）を詠じ、たとえ生活信条を異にする二人であっても、文学はそれを包摂し融合する機能がある、という一種の文学観を表明している。このように広宣は詩作によって人間相互の連帯が拡大進展するものと考えたのである。いいかえれば詩による社交を大いに活用し、その実効をあげたのが詩僧広宣の真面目であるといえよう。幸いに禁苑において貴顕の人々に容易に交際しうる栄達をかちえたことが、広宣の詩による社交と連帯とを一層助長したことであろう。したがってそうした処世に、自己本来の職務を逸脱した好事魔多き行為が頭をもたげた。それは立場上政治の変動に敏感に反応する気性にゆたかであったからであろう。それがかえって俗人的野望家に似た風評をうみだし、縉徒の間で飛語をよびおこす結果になったものと思う。つまりは詩文学に秀抜な力量をよく発揮して、禁苑にその名を馳せた傑僧であったがために、当時の知識人たちがたどった処世体験と同じように、一時的名声の蔭に陥入りやすい人生の落し穴からもつねに迫られていた人物が広宣ではなかったかと思う。

結

以上みてきたように広宣は詩における多様な様式をよくこなし、時流の波に便乗して公卿権門の社交界で、詩才をよく発揮した一流の詩僧であったことを認めないわけにいかない。かような個性をもった広宣がにわかに栄達を掌中に入れたばかりに、野望をいだいた俗人的素振りをみせたことは残念であった。それが詩僧広宣の評価をかなりマイナスにしたと思われる。

唐代詩僧が名実ともに文壇上で活躍したのは、中唐期に入って顕著となり、中唐の詩僧がおおむね江南の地において、それぞれ詩をもって社交集団的活躍をもっぱらにしたのが、その特色であることはよくかたられるところである。これに対し広宣はそのかみ司馬相如、李白、杜甫らの大詩人とゆかりが深い蜀の地で詩名をあげ、禁苑に招かれて貴顕や文人などと詩的社交と連帯とをほしいままにした。その点でいわゆる江左集団の詩僧とは色あいを異にする詩僧であった、といってよかろう。ただ他の詩僧と比較して広宣の法脈はかいもく判然としないところがある。したがって同時期に名声を馳せた詩僧の霊澈などとは風変りな詩僧広宣であった、といいたい。

なお辛島驍氏は「魚玄機・薛濤」（集英社版漢詩大系八）の著書において、広宣についていささか考証をほどこしておられることを附言しておきたい。

（本学教授　中国文学）